

私立学校特別研修会

外国語（英語）教育改革特別部会

〔西日本エリア〕 実施報告

主催 一般財団法人私学研修福祉会 協力 一般財団法人日本私学教育研究所
日本私立中学高等学校連合会 後援

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成26年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象としているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていることから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成27年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に埒外に置かれた感は否めません。

については、私立学校においても、外国語（英語）教員の外国語（英語）力・指導力強化を図るためには、教員が21世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、平成27年度より専門家の指導による特別研修「外国語（英語）教育改革特別部会」を、全国5つのエリアで実施いたします。

当部会〔西日本エリア〕では、初日は中学校におけるiPadでの英語授業・共同学習等に先進的に取り組む同志社中学校・高等学校を会場に、ICTを活用した英語の授業等の視察、改革に関する実践発表、視察校の教員を交えて意見交換等を行った。翌日は市内のアランヴェールホテル京都において、東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授の投野由紀夫先生による講演、私学の新しい英語教育の中核を担うべく文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」に参加した私学教員を講師に迎え、中央研修で最も関心を持ち、有益と感じた内容について、ワークショップを通して学んだ。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める情報交換会等、多彩なプログラムを用意した。

- ◆ 会 期 ◆ 平成28年2月19日（金）～20日（土）
- ◆ 会 場 ◆ 同志社中学校・高等学校（19日）
アランヴェールホテル京都（20日）
- ◆ 参加人数 ◆ 70名
- ◆ 参加対象 ◆ 私立中学校・高等学校・中等教育学校の英語科教諭
- ◆ プログラム ◆

- ① 研究授業 同志社中学校・高等学校（ICTを活用した英語の授業視察等）
- ② 実践発表 テーマ 「ICTを活用した英語の授業デザイン」
発表者 反田 任 同志社中学校・高等学校 教諭
- ③ 質疑応答・意見交換 グループでの意見・情報交換を通して課題を探索します
- ④ 講演 演 題 「GOAL2020にみる英語教育改革のポイントと指導への示唆」
講 師 投 野 由紀夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
- ⑤ ワークショップ ※ワークショップ後にグループに分かれて意見交換会を行います。
テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」

(1) 語彙指導 / (2) 文法指導デモレッスン / (3) 文法指導レッスン分析

※文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者が担当します。研修内容の一部をご紹介します、日頃の授業での活用方法を考えます。

指 導	中 川 千 穂	昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校	教諭
	田 中 步	工学院大学附属中学校・高等学校	教諭
	伊 藤 佳 貴	大同大学大同高等学校	教諭
	原 田 貴 之	愛知中学校・高等学校	教諭
	東 山 泰 浩	京都外大西高等学校	教諭
	石 井 玲 子	大阪成蹊女子高等学校	教諭
	桑 野 健太郎	九州国際大学付属高等学校	教諭
	吉 田 美和子	鹿児島育英館高等学校	教諭

◆ 日程概要 ◆

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		30	0 10	0 15	45 0	30	0	0 30 45	0 20
2月19日(金) 〔同志社中 高〕				受付	開 会 式	①研究授業		② 実践 発表	③ 質疑応答 ・意見交換会
2月20日(土) 〔アランヴェ ールH京都〕		④講演	⑤ ワーク ショップ	昼食	⑤ ワーク ショップ		意見 交換会	閉 会 式	

◆ 学校紹介 ◆

同志社中学校・高等学校〔理事長 水谷 誠／校長 木村良己〕

1875(明治8)年、新島 襄 によって創立され、「こころざし」によって建てられた志(私)立学校であり、キリスト教を徳育の基本とするキリスト教主義学校である。「同じ志を持つ者たちの結社=同志社」という学校名称の真ん中に「志」を据え、「キリスト教主義・自由主義・国際主義」という三つの「志」を軸に、「一国の良心」とも言うべき「良心を手腕に運用する人物」を世に送り出すことに努めている。

戦後の教育改革の中、今出川キャンパスで同志社中学校、同志社高等学校としての歩みを始め、高等学校の岩倉キャンパス移転に伴いそれぞれの歴史を刻んできたが、2010年に「中高統合」、中学校の今出川キャンパスからの移転を経て、現在、同志社中学校・高等学校として建学の精神に基づく教育を実践している。2006年に開校した同志社小学校(大学付属)と共に、岩倉キャンパスでの小、中・高一貫という「同志社良心教育」の一大潮流となっている。

比叡山・北山・宝ヶ池に包まれた広大なキャンパスには、中学教室棟：立志(りっし)館・高校教室棟：桑志(そうし)館・チャペル棟：宿志(しゅくし)館という3つの「志」を核にして、それらを支える各種機能を有した校舎群が建ち並ぶ。中学では、生徒作品や教科教材を展示したメディアスペース・教科ステーション・HOME-BASEを教科専門教室に隣接させた参加型の学びと専門的な学びを深める「教科センター方式」。高校では、HOME-ROOMを主体に、異なった指向を持つ仲間たちが共に生き、自主的・主体的に学ぶ「特別教室方式」。いずれも「HOME」という居心地の良い、居場所のある教育空間が創り出され、発達段階に応じた同志社一貫教育を通して、良心を磨きつつ、「豊かな人間性」「優れた学問性」「違いを認め合える共生力」とを培い続けている。2014年度中学新生より一人一台のiPadを導入、ICT教育を推進している。

◆ 講師プロフィール ◆

投野 由紀夫 (とうの ゆきお)

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。1961年生まれ。東京学芸大学大学院修士課程、ランカスター大学大学院言語学科博士課程修了。言語学博士。専門は辞書学・コーパス言語学を応用した英語語彙習得研究。NHKテレビ英語講座『100語でスタート! 英会話』(2003-2005年度放送)で講師を勤め、日本で初めて語学番組にコーパスを導入。中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ委員(2015年10月~)。著書にCorpus-Based Language Studies(共著、Routledge)、『英語語彙習得論』(編著、河原社)、Research on Dictionary Use in the Context of Foreign Language Learning(Max Niemeyer)、『英語語彙の指導マニュアル』(共著、大修館書店)、『コーパス練習帳』(NHK出版)、『コーパス英語類語使い分け200』(小学館)。小学館コーパスネットワーク監修。

◆ 講師・発表者・指導員 (順不同) ◆

投野 由紀夫	国立大学法人東京外国語大学大学院総合国際学研究院	教授
反田 任	同志社中学校・高等学校	教諭
中川 千穂	昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校	教諭
田中 歩	工学院大学附属中学校・高等学校	教諭
伊藤 佳貴	大同大学大同高等学校	教諭
原田 貴之	愛知中学校・高等学校	教諭
東山 泰浩	京都外大西高等学校	教諭
石井 玲子	大阪成蹊女子高等学校	教諭
桑野 健太郎	九州国際大学附属高等学校	教諭
吉田 美和子	鹿児島育英館高等学校	教諭

◆ 特別委員・指導員 (順不同) ◆

反田 任	同志社中学校・高等学校	教諭
田中 歩	工学院大学附属中学校・高等学校	教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所事務局	長代行
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員

◆ 日程表 ◆

2月19日(金)

〔会場 同志社中学校・高等学校〕

12:15	受 付 〔恵潤館3階 大会議室入口〕																																		
12:45	◇開会式 〔会場 恵潤館3階 大会議室〕 司会 川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長代行																																		
	1. 開式 2. 開会挨拶 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 山崎吉朗 3. 視察校代表挨拶 同志社中学校・高等学校 校長 木村良己 4. 日程説明 同志社中学校・高等学校 教諭 反田 任 5. 閉式																																		
13:00																																			
高:13:20 中:13:35	◇研究授業 5時間目 ※HCはハーフサイズクラス(18名)の授業																																		
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学年・クラス・授業名</th> <th>授業者</th> <th>会 場</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中学1年H組「英語HC」</td> <td>入 沢 剛 志</td> <td>立志館3階(英語小教室1)</td> </tr> <tr> <td>中学1年H組「英語HC」</td> <td>丹 波 薫</td> <td>立志館3階(英語教室2)</td> </tr> <tr> <td>中学2年G組「英会話」</td> <td>Daniel Whiteman</td> <td>立志館3階(英語小教室2)</td> </tr> <tr> <td>中学2年G組「英語HC」</td> <td>齋 藤 佳 子</td> <td>立志館3階(英語教室3)</td> </tr> <tr> <td>中学2年B組「英語」</td> <td>反 田 任</td> <td>立志館3階(英語教室1)</td> </tr> <tr> <td>中学3年B組「英会話」</td> <td>Robert Janos</td> <td>立志館3階(英語小教室3)</td> </tr> <tr> <td>中学3年B組「英語HC」</td> <td>宇田川 恭 弘</td> <td>立志館3階(英語教室5)</td> </tr> <tr> <td>高校2年C組「コミュニケーション英語Ⅱ」</td> <td>瀬 尾 由 佳</td> <td>桑志館3階(高2-C)</td> </tr> <tr> <td>高校2年D組「コミュニケーション英語Ⅱ」</td> <td>白 井 利 佳</td> <td>桑志館3階(高2-D)</td> </tr> <tr> <td>高校2年E組「コミュニケーション英語Ⅱ」</td> <td>宮 川 佳 子</td> <td>桑志館3階(高2-E)</td> </tr> </tbody> </table>		学年・クラス・授業名	授業者	会 場	中学1年H組「英語HC」	入 沢 剛 志	立志館3階(英語小教室1)	中学1年H組「英語HC」	丹 波 薫	立志館3階(英語教室2)	中学2年G組「英会話」	Daniel Whiteman	立志館3階(英語小教室2)	中学2年G組「英語HC」	齋 藤 佳 子	立志館3階(英語教室3)	中学2年B組「英語」	反 田 任	立志館3階(英語教室1)	中学3年B組「英会話」	Robert Janos	立志館3階(英語小教室3)	中学3年B組「英語HC」	宇田川 恭 弘	立志館3階(英語教室5)	高校2年C組「コミュニケーション英語Ⅱ」	瀬 尾 由 佳	桑志館3階(高2-C)	高校2年D組「コミュニケーション英語Ⅱ」	白 井 利 佳	桑志館3階(高2-D)	高校2年E組「コミュニケーション英語Ⅱ」	宮 川 佳 子	桑志館3階(高2-E)
学年・クラス・授業名	授業者	会 場																																	
中学1年H組「英語HC」	入 沢 剛 志	立志館3階(英語小教室1)																																	
中学1年H組「英語HC」	丹 波 薫	立志館3階(英語教室2)																																	
中学2年G組「英会話」	Daniel Whiteman	立志館3階(英語小教室2)																																	
中学2年G組「英語HC」	齋 藤 佳 子	立志館3階(英語教室3)																																	
中学2年B組「英語」	反 田 任	立志館3階(英語教室1)																																	
中学3年B組「英会話」	Robert Janos	立志館3階(英語小教室3)																																	
中学3年B組「英語HC」	宇田川 恭 弘	立志館3階(英語教室5)																																	
高校2年C組「コミュニケーション英語Ⅱ」	瀬 尾 由 佳	桑志館3階(高2-C)																																	
高校2年D組「コミュニケーション英語Ⅱ」	白 井 利 佳	桑志館3階(高2-D)																																	
高校2年E組「コミュニケーション英語Ⅱ」	宮 川 佳 子	桑志館3階(高2-E)																																	
高:14:20 中:14:30	6時間目																																		
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学年・クラス・授業名</th> <th>授業者</th> <th>会 場</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中学1年C組「英語HC」</td> <td>香 月 佳容子</td> <td>立志館3階(英語教室3)</td> </tr> <tr> <td>中学1年C組「英語HC」</td> <td>David Foreman</td> <td>立志館3階(英語小教室1)</td> </tr> <tr> <td>中学2年F組「英会話」</td> <td>Daniel Whiteman</td> <td>立志館3階(英語小教室2)</td> </tr> <tr> <td>中学2年F組「英語HC」</td> <td>西 川 奈 代</td> <td>立志館3階(英語教室4)</td> </tr> <tr> <td>中学3年E組「英語」</td> <td>加 藤 哲 也</td> <td>立志館3階(英語教室5)</td> </tr> <tr> <td>中学3年B組「英語」</td> <td>皆 川 祥 吾</td> <td>立志館3階(英語教室2)</td> </tr> <tr> <td>高校2年F組「コミュニケーション英語Ⅱ」</td> <td>瀬 尾 由 佳</td> <td>桑志館3階(高2-F)</td> </tr> <tr> <td>高校2年H組「コミュニケーション英語Ⅱ」</td> <td>白 井 利 佳</td> <td>桑志館3階(高2-H)</td> </tr> </tbody> </table>		学年・クラス・授業名	授業者	会 場	中学1年C組「英語HC」	香 月 佳容子	立志館3階(英語教室3)	中学1年C組「英語HC」	David Foreman	立志館3階(英語小教室1)	中学2年F組「英会話」	Daniel Whiteman	立志館3階(英語小教室2)	中学2年F組「英語HC」	西 川 奈 代	立志館3階(英語教室4)	中学3年E組「英語」	加 藤 哲 也	立志館3階(英語教室5)	中学3年B組「英語」	皆 川 祥 吾	立志館3階(英語教室2)	高校2年F組「コミュニケーション英語Ⅱ」	瀬 尾 由 佳	桑志館3階(高2-F)	高校2年H組「コミュニケーション英語Ⅱ」	白 井 利 佳	桑志館3階(高2-H)						
学年・クラス・授業名	授業者	会 場																																	
中学1年C組「英語HC」	香 月 佳容子	立志館3階(英語教室3)																																	
中学1年C組「英語HC」	David Foreman	立志館3階(英語小教室1)																																	
中学2年F組「英会話」	Daniel Whiteman	立志館3階(英語小教室2)																																	
中学2年F組「英語HC」	西 川 奈 代	立志館3階(英語教室4)																																	
中学3年E組「英語」	加 藤 哲 也	立志館3階(英語教室5)																																	
中学3年B組「英語」	皆 川 祥 吾	立志館3階(英語教室2)																																	
高校2年F組「コミュニケーション英語Ⅱ」	瀬 尾 由 佳	桑志館3階(高2-F)																																	
高校2年H組「コミュニケーション英語Ⅱ」	白 井 利 佳	桑志館3階(高2-H)																																	
高:15:10 中:15:15																																			
15:30	◇実践発表 〔会場: 恵潤館 3階 大会議室〕 司会 田 中 歩 外国語(英語)教育改革特別委員 テーマ 「ICTを活用した英語の授業デザイン」 発表者 同志社中学校・高等学校 教諭 反田 任																																		
16:00	◇分科会(中学校、高等学校授業者との質疑応答・意見交換) 〔会場 恵潤館3階 大会議室〕 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">研究授業・実践発表を受けての質疑応答の後、グループに分かれて意見交換を行います。</div> 1. 質疑応答(16:00~16:20) 司会 山崎吉朗 一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員 指導助言 同志社中学校・高等学校 英語科教諭 2. 意見交換会(16:20~17:20) ファシリテーター 反田 任/田中 歩・外国語(英語)教育改革特別委員、山崎吉朗・主任研究員																																		
17:20																																			

09:30	<p>◇講演 〔会場：3階 五条〕</p> <p style="text-align: right;">司会 反田 任 外国語（英語）教育改革特別委員</p> <p>演 題 「GOAL2020 にみる英語教育改革のポイントと指導への示唆」</p> <p>講 師 国立大学法人東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授 投 野 由紀夫</p>
11:00	
11:10	<p>◇ワークショップ【(1)－11:10～12:10】</p> <p>テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」</p> <p>※文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者が担当します。研修内容の一部をご紹介します、日頃の授業での活用方法を考えます。</p> <p>※ワークショップは3グループに分かれて行います。</p> <p>(1)－語彙指導</p> <p>指 導 グループA：大同大学大同高等学校 教諭 伊藤 佳 貴</p> <p> グループB：昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校 教諭 中 川 千 穂</p> <p> グループC：工学院大学附属中学高等学校 教諭 田 中 歩</p> <p style="text-align: right;">〔会場：A：2階 嵯峨・貴船／B：3階 高雄／C：3階 五条（大）〕</p>
12:10	◇昼 食 ※各ワークショップ会場
13:00	<p>◇ワークショップ【(2)－13:00～14:00 / (3)－14:00～15:00】</p> <p>テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」</p> <p>(2)－文法指導デモレッスン</p> <p>指 導 グループA：鹿児島育英館高等学校 教諭 吉 田 美和子</p> <p> グループB：大阪成蹊女子高等学校 教諭 石 井 玲 子</p> <p> グループC：愛知中学校・高等学校 教諭 原 田 貴 之</p> <p>(3)－文法指導レッスン分析</p> <p>指 導 グループA：九州国際大学附属高等学校 教諭 桑 野 健太郎</p> <p> グループB：京都外大西高等学校 教諭 東 山 泰 浩</p> <p> グループC：愛知中学校・高等学校 教諭 原 田 貴 之</p> <p style="text-align: right;">〔会場：A：2階 嵯峨・貴船／B：3階 高雄／C：3階 五条（大）〕</p>
15:00	<p>◇意見交換会</p> <p>ワークショップに関して、指導講師および参加された先生方で、質疑応答を交えながら意見交換を行います。</p> <p style="text-align: center;">ファシリテーター 反田 任、田中 歩・外国語（英語）教育改革特別委員／山崎吉朗主任研究員</p> <p>※ワークショップグループ（A・B・C）に分かれて行います。</p> <p style="text-align: right;">〔会場：A：2階 嵯峨・貴船／B：3階 高雄／C：3階 五条（大）〕</p>
15:45	<p>◇閉会式 〔会場：3階 五条〕</p> <p style="text-align: right;">司会 川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長代行</p> <p>1. 開式</p> <p>2. 総括 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 山 崎 吉 朗</p> <p>3. 閉式</p>
16:00	解 散

私立学校特別研修会外国語（英語）教育改革特別部会【西日本エリア】

実施内容概要

平成 27 年度の新規・重要事業の一つとして新たに設置された外国語(英語)教育改革特別部会(以下、「特別部会」)は、国が進める英語教育改革、大学入試制度改革の動きに対応していくため、英語教員の英語(外国語)力・指導力の強化、及び 21 世紀型の英語教育にふさわしい最新の教授法を積極的に取り入れることを目的とした、専門家の指導による実践的な教授法に係る研修会である。

本年度は全国 5 つのエリアで開催した。会期は 2 日を基本とし、英語教育において先進的な取り組みを行う学校の英語授業視察並びに専門家による講演・ワークショップ等を研修会の柱として実施した。また、文部科学省による「英語教育推進リーダー中央研修」の研修実習の受け皿としての役割を併せ持ち、本研修会で初めて、文部科学省による「英語教育推進リーダー中央研修」の受講者によるワークショップ等が行われた。

本研修会は、2 月 19 日(金)～20 日(土)の 2 日間にわたって京都市で開催した。初日は同志社中学校・高等学校での学校視察と反田任・同校教諭による ICT を用いた学校の取り組み・授業についての実践発表、研究授業者との質疑応答・意見交換会が行われた。2 日目はアランヴェールホテル京都を会場に投野由紀夫・東京外国語大学教授による講演がおこなわれ、続いて文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修会」受講者(以下：指導員)による英語によるワークショップ・意見交換会が行われた。

当初募集人員は 60 人であったが、予想を大幅に上回る参加申し込みが殺到し、視察校・会場のご理解・ご協力を頂き、開催人数を 70 名に増やし開催した。本研修会プログラム内容に対する先生方の関心の高さを伺い知ることができた。

開会式

同志社中学校・高等学校の恵潤館の会議室での開会式は、まず、山崎吉朗・当研究所主任研究員が主催者を代表して挨拶を行った。挨拶では、参加者及び視察校にお礼を述べるとともに、「本研修会は全国に英語の先進的な取り組みを行っている私立学校を取り上げて研究することで互いに進んでいこうという目的で実施している」と、研修会の趣旨について説明。そして、今回の研修会の特徴を以下の 3 点にまとめた。①同志社中学校・高等学校は英語教育だけでなく ICT も先進的な取り組みが行われている学校であること、②投野由紀夫・東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授は CEFR の研究をされており現在行われている中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ委員のメンバーで、今回当部会では初めて講演をお願いしたこと、③今年度文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修会」を受講した先生方が指導員としてワークショップを行うこと。最後に文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修会」の案内を行い、受講者にとって実りある研修会になることを期待する旨を述べた。

続いて視察校代表の木村良己・校長から、京都、同志社への歓迎の挨拶をされた後、同志社の成り立ちと脈々と受け継がれている理念について、現在小中高で約 2500 名が学ぶ校舎は生徒が成長するためには環境が大切だろうと力を注いでいること等について説明された。「生徒は、未来が教科書に出ている歴史年表の右端にあると勝手に思い込んでいるが、教員は未来が岩倉キャンパスにあると思って、次世代を担う生徒を育て、生徒の成長を邪魔しない距離感で教育活動を行っている」と、同校の教育のあり方を話した。最後に「制服はない、生徒は近隣のレストランやコンビニも同志社の校内と思っているくらい、非常に自由な空気の中で学びを重ねている。今回の公開授業等を通じて自由な空気をみなさん一人一人が吸い取って、それぞれの現場に持ち帰って頂ければ」と述べ、研修会の成功を期して挨拶された。

挨拶の後、反田任・同校教諭、より日程説明が行われ、最後に指導員の先生方の紹介があり、開会式は閉式となった。



山崎吉朗・当研究所主任研究員



木村良己・視察校校長



反田任・視察校教諭(特別委員)

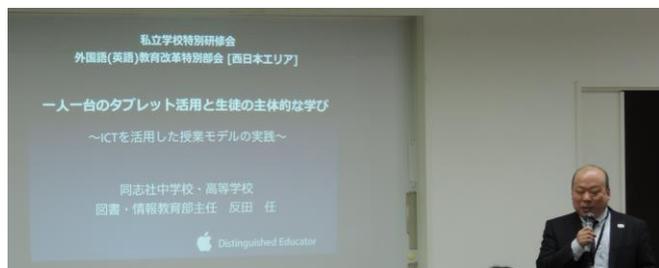
研究授業

視察校のご厚意で大変多くの授業行って頂き、参加者は中学校と高等学校の校舎を歩き来しながら、日程表の通り 2 時限 18 コマの授業を見学した。参加者は各人の興味・関心にそって見学し、幅広く見学した参加者や一つの授業を集中的に見学した参加者など様々であった。実施案内で見学希望の授業を事前に決めていた参

加者も多く、中には、職員室等を見学させてもらえたという参加者もいたようである。生徒は、多くの見学者がいる中でも、普段と変わらぬ様子で生き生きと授業を受けていた。それだけでなく、授業の合間など、開会式で校長先生からお話があった通り、自由な雰囲気を感じられた。授業を見学した参加者の多くからは「授業に取り入れたい」など良い影響をもらった。



実践発表



反田任・教諭（当部会特別委員）より同志社中学校・高等学校における ICT の取り組み、ICT を活用した英語の学習について発表を頂いた。現在の学習環境の整備は 2010 年に中学校が岩倉キャンパスに移ってきた時から始まった。まず、欧米型の教科センター方式の導入を行い、中学校では生徒のタイムマネジメントを育成するためにノーチャイムを導入した。タブレットの導入については、2012 年 2 学期に 20 台の iPad を 2 年生 3 クラスで試験的に導入し、2 ヶ月間の公開授業を含む検証が行われた。この際に、生徒から「自分のペースで学習ができてよい」などのフィードバックがあり、2013 年より授業時に 1 人 1 台が使えるように導入された。

さらに翌年の中学校の新入生からは授業時間に限らず、持ち帰れるような形で iPad mini を各自に購入してもらっている。iPad mini は授業・家庭学習の両面で用いられており、電子辞書の代わりという側面もある。2016 年の 4 月には 900 台に達し、既に全教室に高速 Wi-Fi が設置されている。今後は全教室にプロジェクタを入れる予定である。

これらの ICT 設備はどのように活用されているかについて、まず理念を「iPad+ABC」という図式で説明がされた。A は Active Learning、B は Blended Learning、C は Collaborative Learning の頭文字をとったものである。これら ABC の繋がりを基礎に置き、思考ツールとして iPad を用いて、創造力・思考力をもった「主体的に学ぶ」生徒を育てることを目的としている。次に、ソフト面では学習ポータルサイトをオープンソースから構築運用している。このポータルサイトは教師・生徒の相互の利用が可能で、教師から教材や課題などが PDF の形でアップロードされ、生徒は各自ダウンロードする仕組みになっている。生徒側からも課題の提出を行える形になっている。授業時にはアプリを用いての発音練習、Skype による複数の先生方との授業、SNS を用いての英文添削やプレゼンテーションツールとして用いる等幅広い活用方法があると説明があった。また、反田先生は ABC の C を collaborative(協働)から co-creative(共創)へと変えていきたいと述べた。

実際に行われた英語の授業の説明や、使用の仕方についても説明があった。生徒達の英語を学ぶモチベーションを、自分たちの生活や実際の社会に関わりのあることを学ぶ事を通じて上げる事ができる。英語はあくまでもツールで、考えの表現が大切であることを強調された。ICT を用いることで学年だけでなく、学校を越えた学び合いもできること、大切な事はコミュニケーションである。4 技能学習は ICT を使ってやるとやりやすく、発表で取り上げられた ICT を用いた授業は新しい授業デザインとして提言できるのではないかと話した。

最後に、現在は「どのように教える」から「どんな学び方を教える」へ変化してきているが、さらに「どんな学び方を学ぶ」へと変わる事の大切さを話し、同校では教科センター方式、Wi-Fi・電子黒板などの ICT に加え、個人ツールの iPad が加わったことで、一斉授業から抜け出た形の発信型の英語学習へと進んでいけたと発表をまとめた。

質疑応答・意見交換会



初日最後のプログラムとして研究授業者への質疑応答と、研究授業者を交えたグループでの意見交換会を行った。20 分間の質疑応答では、「ICT とアナログベースとの学習効果の違い」「SNS を使ったやり取りの弊害はないのか」「授業外での英語の取り組み」等の質問が寄せられ、同志社中学校・高等学校の担当の先生方が丁寧に解説していた。その後の 60 分間の意見交換会では、参加者が質問したい授業実践者の先生の所に集まる形で行い、熱意のこもった意見交換会となった。質疑応答の際に聞けなかったことや同志社中学校・高等学校の取り組みについて、さらに、授業実践についての具体的な内容などについてより踏み込んだ研究協議となった。先生方からは「参考になった」「勉強になった」等の意見が多く見られた。

講演

2日目はアランヴェールホテル京都を会場に、まず、投野由紀夫・国立大学法人東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授による講演を行った。講演は現在の英語教育改革は「グローバル化」や「英語力の実態が明らか」になったことが背景となって進んでいるという説明を皮切りに、「CAN-DO」について取り上げた。「CAN-DO」は英語を使って何が出来るようになるかを示したもので、もともとは「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」から生まれた考え方である。CEFRは学習している言語のレベルの指標を表し、もともとEUで使用されていたが、現在は世界共通の言語指標として使われるようになってきている。CEFRは基準の裏側に膨大なCAN-DOリストがある。この「CAN-DO」の考え方を日本の教育にも取り入れることによって、「教員・生徒の『目標』設定の考え方を変える」「ことばを使う教育へ」「小中高大と一貫した指標のもとでの教育」「教科書の質の管理」等を目的にしている。英語を使えることを目標に据えるためには小中高大が連携した一貫した教育が欠かせないことが強調されていた。



また教科書に関しては、まず、以前(2008年頃まで)はアジア諸国に比して内容が薄かったが、現在はようやくアジア諸国と遜色なくなったこと、次に国内で使用されている教科書は会社によって使われている語彙に大きなばらつきがあり、押さえておきたい基礎的な単語ですらも3割程度しか共通しないといった現状があることが説明された。その点を踏まえて、英語の語彙指導について、先生が単語を目利きし全ての単語を一様に指導するのではなく、基礎的な単語と記憶するだけで良い単語を見分け、単語個体ではなくチャンク(情報のまとまり)で覚える事などが説明された。最後に今後の授業のあり方について、新しい既習学習内容をサイクルして定着、自動化が英語の習得につながる授業になると述べた。

これから先、言葉の力が益々大切になる。教わった言葉を使えるようになる方向へ、学校で教わったから使えるようになったと生徒から言われる授業に変えていく必要がある。そのためには、明確に目標を設定し、英語力のイメージをしっかりと持って、何をどのように仕込んで使わせるかを授業デザインに入れていく、より遠くの目標を見て教えられると言う視点を教員が持つことが大切であると述べて講演をまとめた。

ワークショップ・意見交換会

上記の通り、今回、当部会では初めて文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修会」受講者の指導によるワークショップが行われた。文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修会」はカスケード方式というやり方で、受けた研修内容をそのまま行い、広く伝達していく方式をとっている。本研修会ではリーダー研修会で行われたものの内「語彙指導」「文法レッスン」「文法レッスン分析」の3つが行われた。参加者を3グループに分け、全て英語で行われた。参加者が最初はなかなか活動になじんでいけない様子であったが、時間の経過と共にペアワーク、グループワークでは活発に意見が飛び交う様子が見受けられた。3つのワークショップを併せて3時間という長時間ではあったが、参加者は途切れることなく真剣に取り組んでいた。「生徒の立場に立つことができ良かった」という意見が多く見られた。



ワークショップ後の指導員との意見交換会では、ワークショップの内容や「英語教育推進リーダー研修」について、「研修後行った授業に変化があったか」など初日の意見交換会と同様に、踏み込んだ質問が多数あった。ワークショップと質疑応答がセットになることで、ワークショップの内容や英語教育のあり方について参加者は理解を深める事になった。

閉会式



山崎吉朗・当研究所主任研究員から、参加者を労うとともに文部科学省事業「英語教育推進リーダー研修」の来年度の募集についての詳しい説明があり、参加者の先生方に研修の参加を促した。研究所の研修会も来年度以降も継続していく旨を伝え、これから計画を行っていくので、勤務校の先生方にも推奨の上、参加してほしいとお願いした。最後に、今後の英語教育改革の方向性に触れ、今後も研究所として研修会等に取り組んでいくことを述べ、「学校で今回の研修会から得たものを広め、また議論の題材にして頂き、生徒に還元して頂ければと思う」と総括した。

◆ 都道府県別参加者数 ◆

No.	都道府県名	参加者数	No.	都道府県名	参加者数	No.	都道府県名	参加者数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	0	34	広島	5
3	岩手	0	19	山梨	2	35	山口	0
4	宮城	3	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	0	37	香川	1
6	山形	0	22	静岡	3	38	愛媛	0
7	福島	0	23	愛知	2	39	高知	5
8	新潟	0	24	三重	1	40	福岡	1
9	茨城	0	25	滋賀	2	41	佐賀	0
10	栃木	0	26	京都	0	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	14	43	熊本	1
12	埼玉	0	28	兵庫	3	44	大分	1
13	千葉	0	29	奈良	4	45	宮崎	0
14	神奈川	2	30	和歌山	0	46	鹿児島	5
15	東京	8	31	鳥取	0	47	沖縄	1
16	富山	2	32	島根	4			
						計	70	

アンケート結果

回収率 81.4% (57名 / 70名)

研修会への参加目的

参加目的としては大きく3つの目的があげられた。1つ目はこれからの英語教育改革の動向を知ること。2つ目は英語による英語の授業等、授業方法の向上のため、3つ目は一番多い目的であったが、英語授業でのICT活用の視察であった。また、少数ではあるが、全英語教員の意識改革を図るためや、私立学校に求められる外国語教育のレベルを知るためといった目的もあげられた。

- これからの外国語教育の動向を知り、自校の授業改革に活かすため。
- 英語教育改革が進む中、既存の教授法から脱却できない状況で、幅広いメソッドを学ぶため。
- 教育改革の理解を深め、よりよい授業のヒントを得、学校で共有するため。
- 生徒に「本当に使える英語」を身に付けさせるヒントを得るため。
- コミュニケーションの土台となる、語彙、文法指導を現行の制度化でいかに工夫して行うかを学ぶため。
- 高校コミュニケーション英語で4技能を習得させる方法を知るため。
- ワークショップの内容を知るため。
- ICT導入を予定しており、効果的な使い方等実践的な方法を学ぶため。
- ICTを活用した英語の授業方法を学びため。(授業や家庭学習でのiPadの使い方、学校での管理の仕方など)
- ICTを利用した授業展開の実例を学び、本校の導入への検討材料にするため。
- 最新のICT、アクティブ・ラーニングは実際どのように授業を組み立てているのか視察するため。
- 全英語教員の意識改革を図るため。
- 私立学校に求められる外国語教育のレベルを全国の高校でどのように考えているか知るため。

研究授業 (同志社中学校・高等学校)

同志社中学校・高等学校のICT活用についてはほとんどの参加者は、参考となり、自校での可能性や取り組みを考える上で有益となっていた。またiPadを使うことにより、様々なアプリを使用し、アクティブ・ラーニング等の授業展開にも興味を・関心が寄せられ、充実した視察となった。

- どの授業も「学び合い」を大切にされていることが印象的であった。
- 自校でも中学1年生で「1人1台iPad導入」を予定しているが、特に低学年での利用法、英作文、またアプリは参考になった。

- 中学校での単語とイメージを結びつける PowerPoint での語彙練習や、iPad を使った発音や英作文の確認、スピード風のゲームでの感嘆文導入、Frozen のアテレコなど、工夫が満載であった。
- iPad をふんだんに使用した授業は興味深い。プレゼン、英作文問題においても生徒達が iPad を自由自在に使いながら効果的に言語を習得していた。
- 生徒の能動的な学習の姿勢が素晴らしかった。ペアワークの間も生徒が積極的に音読したり、意見交換したりするように指導するには、継続的な指導で習慣化することが必要と感じた。
- 英語教育の原点に帰った気がした。子ども達に考えさせ、発表させるスタイルはやはり必要と実感した。
- 同じ教材でもそれぞれの先生のカラーが出ており、工夫された授業をされていた。授業に生かすヒントがあり、明日から試してみたい。
- iPad を使用することで、様々なアクティビティができ、無駄な時間を除き、生徒が楽しく積極的に学ぶことが、使える英語を身に付ける上で重要であると学んだ。
- 中学校の英語学習をする環境が整っていること、生徒がテストのためではなく主体的に学んでいる点が参考になった。
- タブレットを使ったプレゼンのやり方や絵本を使った作文指導、授業でドラゴンディクテーションやロイロノートを活用したアクティブ・ラーニングが参考になった。
- 生徒が英語を使う量が圧倒的に多かった。ハーフクラスの展開の仕方、教科センター等が参考になった。

実践発表（反田 任先生）

ICT 活用に関して、使用しているソフトや方法及び環境の整備の過程や管理・費用面に到るまでの詳細な内容について、参加校のこれからの導入や検討の参考になり、参加者の満足度も高かった。

- ICT 機器の利活用、プレゼンに対する相互評価が参考になった。
- 環境整備の重要性を実感した。学校側の設備が十分でないと、iPad を持たせてもその価値は発揮できずじまいになってしまうと感じた。
- デジタル教材や iPad の導入はアクティブ・ラーニングを進めるために有効な手立てであることが分かった。
- iPad を使用し、他校の高校生との交流、英会話サイトでのやりとり等、人や社会とつながっていく学びを実現していくという、iPad 導入のメリットがよく分かる話で、ビジョンが明確であった。
- ICT 導入を段階的に取り入れていた点が参考になった。また、iPad×ABC や教科センター、ノーチャイムなどコンセプトが具体的に示されている点が魅力的である。
- 様々な可能性を知ることができ、刺激を受けたが、同時に経費の面で学校側から、また他教科先生方からも大きな理解を得る必要が不可欠であると感じた。
- プレゼンテーション、英文添削、音読テストと、生徒一人ひとりが確実に取り組めることが実証されていた。次から次へと iPad の利便性を活用し、アイデアを実践されていることが素晴らしい。
- Skype を使った Online 英会話や SNS を使った他校とのやりとりなど、校内外に関わらず、学習の機会を幅広く生徒に与えていることに驚いた。
- 導入前から導入後の活用までの課題やその解決法までがよく分かり、今後導入を検討していく上で大いに役立った。
- 管理や費用の面は難しいが、音声教育の面で絶大な効果が発揮できると感じた。英語だけでなく、他教科も使えるので、今後導入が広がるのが考えられる。
- 学校独自の学習ポータルサイトを立ち上げ、オンラインで生徒の学習を支援する取り組みを本校でも取り入れていきたい。
- iPad の導入と学習ポータルサイトの構築により主体的な学びにつながることで、創造力、思考力を身に付けさせること、知的好奇心の活性化につながることを具体的に学ぶことができた。
- 自校は常勤のネイティブがおらず、英会話も外部委託で、普段の授業でネイティブが不足している現状にある。そのため、Skype を使ったプレゼン指導等は参考になった。
- iPad を利用することで英語でのアウトプットの幅が非常に広がることに驚いた。
- 生徒が考え、生徒が動く、気づく、使う、使えるようになることが大切だということが分かりました。

分科会（質疑応答）

研究授業視察と反田任・教諭の実践発表を受けての質疑応答、意見交換であったが、特に研究授業者とのグループに分かれての研究協議を行ったことにより、より詳細な内容を質問し、理解を深めることができていた。また、参加者同士でも協議・情報交換が行われ、有意義であった。

- 研究授業の背景にあるものを詳しく聞くことができた。
- 研究授業で視察できなかった中学校の先生の話聞いたが、iPad を 1 人 1 台導入し、教員の研修や意思疎通の話、また、文法指導をどこまで削るか等々、先生方の中でも議論が分かれつつ、一方でアクティブ・ラーニングを推し進めるために試行錯誤されたこと等、参考になった。
- 授業準備の段階での先生方の準備や英語科の先生方との協力体制について実際に話を聞け、参考になった。
- 授業からだけでは分からなかった部分（何を目的としての活動だったのか、どのように準備をされたかなど）が詳しく聞いた。

- 他校においても自校と同じ問題を抱えていることがわかり、その上で、今後、どのように対処すべきかをお互いに意見交換することができた。
- 新しい実践までの苦勞を聞くことができ、参考になった。iPad の導入後も指導する面が増え、大変ではあるが、先生が楽しそうに授業に臨んでおられる様子が伝わった。
- 実際に授業を視察した先生の話の小グループで聞くことができ、有意義であった。
- 大学入試の有無や入試形態の多様化で生徒のニーズやモチベーションも多様化している印象を受けた。一方で今の子ども達は話す活動が「好き」ということも、今後の指導に活かしていければと思う。
- 教科会でのコンセンサスの取り方等、現実的な細かい問題も聞けて有益だった。
- ICT を用いた授業の準備の仕方や、各先生方の授業への工夫・意図を直接伺うことができ、参考になった。
- 現場の先生方のアイデアの出し方、そこに到るまでの苦しみ、解決方法等参考になった。
- 生徒が成績のためではなく、自分のために学習しているという話が印象に残った。
- iPad を使っても、生徒の英作文をチェックする等、時間がかかるところは時間がかかることが分かった。

講演 【投野 由紀夫先生】

日本の英語教育改革について、自校の英語教育の方向性を考え直す機会となった講演であった。また、Can-Do List や CEFR の考え方を再考する機会となっていた。さらに語彙に関する内容については、今後の指導に大きな影響を与えていた。

- どのような視点で Can-Do List を作成すれば良いかを考えるきっかけになった。また単語力をつけるというのはどういう指導をすれば良いのか参考になった。
- CEFR について、ほぼ知識がなく、学校で作成している PDCA も講演内容のものがベースになっていないことを認識した。また語彙も core になるものを使えるようにし、またその深さを理解できていないといけないことも分かった。
- 普段の授業デザインを見直す良い機会になった。特に語彙指導、リーディング（音読）の指導等、教師側がしっかりと内容を選定してやるのが大切と感じた。
- 授業中の説明は4分の1程度に、後は生徒の活動を引き出すような、使える英語を増やす意識で、実践していくことの大切さを再認識できた。
- 語彙指導について、使えるようにすべき基礎と、分かればよいものに分けて考え、チャンクで基礎を繰り返し練習することの大切さがよく分かった。
- GOAL2020 の内容の説明を始め、国が求めている、英語教育の方向性について分かり勉強になった。また、語彙力についてイメージを持たせること、基本単語の大切さ等、具体的に説明は参考になった。
- CEFR-J のガイドブックを読み、CEFR-J の Can-Do Statement で十分なのではと思っていたが、より具体的に、より現実味のある状況で表記することの意義がよく分かった。ただし、この取り組みは学校全体で生徒の姿勢・態度を育てていかないと難しいものだと感じた。
- Can-Do List の作成を始めているところなので、とても役に立つ講演であった。
- 新課程での文部科学省の意図することが今ひとつ理解し切れていなかったが、講演でイメージが具体化した。これまで聴いてきた講演等は曖昧な印象しかなかった。
- 文部科学省の進める改革の背景や今後の見直し、コア 2000 語の大切さがよく分かった。
- 基本単語の重要さと教科書によってカバーしている英語がまちまちであるという話は全く知らず、非常に有益であった。
- CEFR の考え方、ボキャブラリー学習の考え方が非常に興味深い。重要性と必要性が分かり、重要な 100 語を基に 2000 語レベルに達させながら、語彙力の向上を目指すことが分かった。
- 全く新しい視点に加え、今まで意識してきたことを理論的について分かりやすい説明であった。単語テスト、指導一つをとっても、改善していける、すぐに取り入れられることがたくさんあった。
- 英語の教員のみならず、国をあげてのプロジェクトがスタートしていることを感じた。これから期待するのは、Can-Do List に沿った教科書である。また国語科とも協力し、表現する力を母語でもできるようにしていくと英語で表現しやすくなると思う。
- 英語教育のメソッドについて、公立と「取り組みが遅れている私学」の差は広がっていくばかりだという話を受け、自分自身しっかりと研修を積み、学校をあげて新たな取り組みを模索していく必要性を強く感じた。
- 日本が、他のアジア諸国と比べ、英語力が低い理由が具体的にわかった。語彙レベルに応じた練習法、「単語→チャンク→文への展開」が参考になった。
- Can-Do の使用法がよくわかった。それと同時に我々教員のマインド・リセットがどこまで浸透できるか等課題も理解できた。設定の仕方やメリハリをつけた語彙指導は自分が意識できておらず、参考になった。投野先生の研究が反映された教科書が中・高で早くできることを願っている。

ワークショップ

英語による英語の授業をテーマとしたワークショップであり、それぞれの参加者の学校の実情により、受け取り方も色々であったが、概ね充実した、有益な内容であったという感想が多かった。

- 生徒の視点、また教員の視点で Teach English in English を考えることができた。グループワーク、ペアワ

ークの大切さや必要性を改めて感じると共に、生徒の立場でのグループワーク、ペアワークの面白さ、大変さを感じることもできた。

- 簡潔だが、奥が深く、使えそうなものがたくさんあり参考になった。このような素晴らしい教材を学習できたことは極めて希なことだと思う程の内容であった。
- 自分も授業内でもっと英語を使っていくよう努力したい。「reason to learn」を教師が身をもって示せるように、という話は身にしみた。
- 語彙にせよ、文法にせよ、考える際に多くの事を盛り込みすぎていたと感じましたが、output をどのようにするかは参考になった。生徒の立場になってみて、求めるものが何か、また量より質が大切だと感じた。
- vocabulary を増強するのにどうしたらよいのかと生徒によく質問されるが、記憶に残る学習法のバリエーションが学べた。文法の授業については、日頃からアプローチの仕方を学びたいと思っていたので、特に役に立つことが多かった。使える言葉にするために、また楽しみながら文法が学べるように、これからの授業のやり方を考えていきたい。
- 生徒側に立って活動することで、アドバイス、声かけをしてあげることが、よりよい活動につながる実感ができた。活動例を具体的に示してもらえたので、授業に生かしていきたい。
- 今までの授業で行ったことのない活動を体験することができた。自分が体験したことのないものを生徒にさせるのは難しいので、体験できてよかった。そのまま活動を授業に取り入れるのは難しいが、ポイントを押さえて取れ入れてみたい。
- 様々なアクティビティを知ることができた。とりわけ欧米の言語学習スタイルは興味深かった。英語でのディスカッションは慣れておらず苦労したが、多くの学びもあり、よい経験となった。
- どれも自分自身が楽しく、実際に生徒にやらせてみたい内容だった。講演等で聞いたことのある内容を具体的に体験でき、参考になった。
- 実際に授業で行うことができる内容なので非常に役立った。文法についても、ただ文法書で内容を説明し、例文を覚え、問題をやらせるだけではなく、自分自身のオリジナルな英作文を書かせる作業がある方が定着する。生徒の立場になって実感できる点が多々あり、有意義なワークショップだった。
- 活動の指示が分かりやすく、かつ能力をくすぶるようなタスクになっており、不安を感じながらも楽しく取り組むことができた。生徒に適応させるには、生徒の英語力をかなり高めた上でないと実践は難しいと感じたが、1つの活動を広く分散してとらえれば、実感が可能なものも多くあった。
- 3つのワークショップは、アクティブ・ラーニング、ICTが大変実用的で、使える実践例であった。文法の退屈な授業をどうするか、現場で工夫の仕方はまだ十分あったと反省させられた。
- Vocabularyについては、単に日本語↔英語ではなく、他の writing や listening と組み合わせることのできる学習方法が勉強になった。Grammar1.2については、これまで日本の文法説明書を使って授業をすることが多く、他の方法のイメージがあまりなかったが、具体的な指導法を知ることができて良かった。
- どのワークショップも勉強になった。できれば1つのワークショップの時間がもう少し長ければ良かった。
- 教師として英語で説明する機会をなかなか持てなかったのが、非常に楽しめ、英語で授業をしようという気持ちになった。単語はどの学年、どの単元を教える時にも必要なため、少しの工夫で効果の差が出ると実感した。文法を英語で説明するのは難しいが、context、例文の重要性と output の機会を設ける大切さがわかり勉強になった。
- 実際に自分が生徒になってみると英語で話すことの難しさにあらためて気づかされた。生徒に教える際には複雑な function ではなく、1つの function に焦点を当ててみよう、と考えさせられた。
- 実践的なアクティビティがたくさん紹介されて参考になった。応用して自分の授業に取り入れたいと思う。
- 「英語で授業」に関しては、最初から「無理だ」と投げ出してしまった自分がいたが、今回のワークショップから多くの授業ヒントを得、英語を英語で理解させ、コミュニケーションな活動を通してそれらを使わせるという実践例から学ぶことが多くあった。
- 中央リーダー研修会の内容に大変刺激を受けた。本当に学校の授業を変えられるのか、不安な所は大きいですが、多くの先生方が受講することで世の中が変わっていくと思う。
- 普段は生徒の立場に立って授業をうけることがないため良い経験になった。生徒の立場で、視点で授業を受けることで、また自分の授業を改善させることができるように思う。
- 以前から British Council の研修の内容に関心があり、その一端を見ることができよかった。自分が授業でどのように採用できるかは明確な答えは出せていないが、考えながら授業していきたい。
- ICTを使用することで、生徒の活動の幅が広がること、協働活動ができることが参考になった。英語で英語を教えるテクニック、これまでのやり方をそのまま英語で授業すると、生徒はついていけないと思う。今回学んだように、日常生活と関連付けて授業を展開していくと、生徒は理解できることがわかった。
- 英語での授業をする上で、どうしても日本語がないと難しいと感じている語彙指導や文法指導を学べた点が勉強になった。日本語でなるべく文法用語は使わずに基本文を提示して教えているが、4つのステージで最後は Free Writing までできるのが良いと思った。全ての文法項目をこの4つのステージでできればと思う。
- Grammar1 のレッスンは、Listening から始まり、Speaking と writing まで3技能がカバーできるアイデアがあり、使ってみてみたいと思う。
- アクティビティを通して楽しく学ぶことができた。生徒の現状を鑑み、授業の中で是非生かしていきたい。
- 以前から一度どんなものかを知りたいと思っていたため、実際にレッスンに参加できてよかった。実際に授業を受けてみると、いつも自分がつい陥ってしまう従来型の文法指導の授業の欠点がよく見えた。

- グループワークで楽しく、勉強する方法を学んだ。ある程度できる生徒にはわかって楽しいが、苦手な生徒にはどう感じるか、分からないから分かるように頑張ろうと思って勉強してくれるといいが、全く分からないので、積極的に参加しない生徒も出てくるのではないかと感じた。そこをどのように対応したら良いかが課題だと思う。
- 可能な限りの語彙力からでも積極的に英語で発言させる機会を設ける。発言を強制しない、間違いを恐れないう等、生徒の中で障壁となっている何かを取り除くきっかけになればと思う。

2日目意見交換会

ワークショップ後の指導員との意見交換であったが、各指導員の意見等や、また参加校同士の課題等も話し合わせ、短い時間ではあったが有意義であった。

- それぞれの学校の具体例を聞くことができ、参考になった。
- 指導の先生方に質問もできる機会が、さらにアイデアを頂いた。
- 先生方が日々頑張っている様子がよくわかり、私自身も職場に帰り、仲間とともに活気づいた授業を行いたいと思った。
- 「現実には難しい」という面で悩んでおられるのは全ての先生方に言えることだと思い、ほんの小さなアクションでも、起こさないと現状は何も変わらないと感じた。教員と生徒の気持ちのズレがあっても、少しずつ引き上げていかなければと思った。
- 指導の先生方と再度お話しすることで、細かな確認ができた。
- 他校の様子や、実際の指導法を伺うことができ、良い機会になった。
- 批判的なコメントも含め、率直な意見ができてよかった。
- コミュニケーション・アプローチを採用する上での苦労が聞いて参考になった。
- どうすれば今回の研修で得たものを活かしていけるか、という意見が多く交わされ、自分にとって研修に厚みができるものとなった。
- 中央研修を受けた先生方の研修後の実情を聞き、私学の先生方のプロ意識の弊害とも言えるが、校内で一致団結して改善をするのはどこも大変とわかった。
- 実際の授業での活用例をそれぞれの先生方から聞くことができ、それを自分なりに変えて活用していきたい。
- 英語教員の中でのチームワーク、協力、理解が不可欠で、変えていくには、個人、そして周りの協力が無いとうまくいかないと思った。

研修会への全体の感想・要望等

次年度も引き続き、同じような内容で開催を要望する意見が多かった。また、教員のネットワーク構築や意見交換の場をさらに増やすことを希望する要望も多かった。さらに少数ではあるが、内容についてもいくつかの希望があげられた。

- 今後とも、英語教育改革の大きな動きと、できれば詳細も継続的に情報を教えて頂きたい。現場で活かせる実践例はまだまだ知りたいです。
- 限られた授業時間の中で、効果の上がるアクティブ・ラーニングの授業の仕方を学びたい。入試も変わっていくと思うが、長文読解などはレベルを落とさずにアクティブ・ラーニングで教えるのは難しいように思う。
- できれば授業見学—講演—ワークショップのテーマが関連したものであってほしい。それぞれの現実の場面の食い違いがあり、自分の学びの観点が絞れなくなった。
- ICTについては、地方は全然整備が進んでおらず、細かなノウハウの蓄積が大切（急務）である。同様の企画、また新テストの情報も聞かせてほしい。
- 他県の私立学校の先生方と数名ではあるが、意見及び情報交換ができたことも良かった。親睦会がセットであれば良いと思う。
- 今回は英語ができる生徒限定でワークショップがあったが、次回は苦手な生徒、モチベーションが上がらない生徒（グループ活動に参加しない生徒）への対応を学びたい。
- 是非、次年度も開いてほしい。同僚も参加させたい。
- 参加人数を増やしてほしい。
- e-learning の取り組みは継続してテーマに設定してほしい。学校間の連携が進むように他府県の先生方とのワークショップを開催してほしい。
- British Council のワークショップは実施される先生のオリジナリティを取り入れた方がやりやすくなるのではと感じた。
- 1つの学校に研修を受けた先生方数名に来ていただいて、研修をしていただく機会を設けてほしい。
- CEFR (CEFR-J) についてもっと詳しく理解できるようなワークショップを行ってほしい。
- 1日目の研修終了後等、他校の先生方との意見・情報交換ができる場を設定して、参加した先生方（だけでなくてもよいが）同士のネットワークを構築してほしい。
- 授業以外でのプログラム、国際交流プログラム等をテーマとして取り上げてほしい。
- 盛り沢山の内容でありながら、一つ一つの充実度が高く、本当に参加して良かった。是非同じ内容で東京でも開催して頂きたい。その場合は是非、英語科全員で参加したい。